福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

1984～1993年入学生の英語学力調査：聴解・クローズ・速読の断面から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤枝, 宏壽 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/5377

福井医科大学一般教育紀要　第13号（1993）

1984～1993年入学生の英語学力調査

－聴解・クローズ・速読の断面から－

藤　枝　宏　壽

英　語　教　室

（平成５年10月13日受理）

1　背　景

昭和55（1980）年，本学の開学以来13年の間に大学入試制度はいくつかの変遷をみた。まず，昭和54（1979）年に５教科７科目受験で始められた共通第１次学力試験（以下「共通1次」）は，昭和62（1987）年に受験科目が５教科５科目に削減され，平成２（1990）年にはアラカルト方式の大学入試センター試験（以下「センター試験」）に変わった。また第２次学力試験（以下「２次試験」）においても，昭和62年から受験機会の複数化が図られてＡ・Ｂ日程連続方式となり，平成元（1989）年にはさらに分離分割方式が追加導入された。（付表１参照）

本学においても，開学より５年間続いた２次試験の出題教科ー外国語（英語），数学，理科の３教科が，昭和60（1985）年から英語と数学の２教科となり，高校指導要領の改訂に伴い英語の出題科目は英語Ⅰ，英語Ⅱ，英語ⅡＢ，英語ⅡＣの４科目となった。受験方式そのものも昭和62年には連続方式Ａ日程に，平成３（1991）年には分離分割方式に変わった。

英語教育界における状況変化も見逃せない。まず，指導要領の変遷のあらましをみると，昭和52（1977）年の中学校指導要領の改訂により，英語の授業時数は従前の「標準週３時間」から「週３時間」へとさらに後退し，昭和56（1981）年度から実施された。これに対する強い反対論が効を奏してか，平成元年の改訂（平成２年４月施行）では「週３時間ないし４時間」とやや回復した。「言語活動」も「聞くこと」と「話すこと」とが分離して，「読むこと」「書くこと」と併せて４領域になった。

高等学校では，昭和57（1982）年より，従来の「英語Ａ」「英語Ｂ」「初級英語」「英会話」から「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」「英語ⅡＡ」（音声によるコミュニケーション）「英語ⅡＢ」（読解）「英語ⅡＣ」（作文）の５科目の新設施行が始まり，平成元年改訂では，「英語Ⅰ」

「英語II」「オーラル・コミュニケーションA」「オーラル・コミュニケーションB」「オーラル・コミュニケーションC」「リーデイング」「ライテイング」と分化され，口頭によるコミュニケーションが重視される傾向を示している。

語彙に関しては，従前は中学～高校を通して最高4700語の新語を学習できるとされていたが，昭和57年度（実施）からは最高2950語に制限され，平成元年改訂でもほぼ同数の「2900語程度」の制限となっている。

「国際化」「コミュニケーション」を求める声が教育界内外で高まるにつれて，中学・高校に外国人英語講師（AET＝Assistant English Teacher）を配置する都道府県が次第に増え，昭和62（1987）年にＪＥＴ（Japan Exchange and Teaching）プログラムが発足すると，その増加は画期的となる。日本全国における外国人講師の総数が，昭和55年で35名，昭和60年で167名であったものが，昭和62年は848名，平成２年は2284名，平成４年では3324名と，ここ10年間で著しく増加している[1]。

他方，海外研修（１カ月程度も含む）を経験している英語教師は，昭和62年の調査で中学校において62.4%，高校で70.9%であるという[2]。

教育機器の開発・普及もめざましく，テープレコーダーやＴＶのない家庭や学校は皆無に等しい。ＬＬが学校に導入されて約30年，時代はＣＡＩ（Computer Assisted Instruction）に向かっており，ＢＳを通じて生の英語番組に触れる機会も増大した。

私塾，私立小学校などにおける早期英語教育の熱も高まってきており，英会話学校の宣伝は市井に溢れている。

いずれの面においても，英語教育をとりまく学校・社会の環境・条件は，「コミュニケーション」「国際化」の方向に大きく展開してきていることは明白である。

以上のような大学入試および英語教育界の状況変化を勘案するとき，本学の入学生の英語学力は果たしてどうなっているのか，その実態把握が強い関心の的とならざるを得ない。幸い，筆者は，昭和59（1984）年より毎年４月，入学生に対して英語の聴解テスト，クローズテスト，速読テストを同一問題で実施してきた。その目的は，継続調査により新入生の英語学力の年次差を知ることと，授業開始前のプリテストとすることであった。

今春でちょうど10回目の調査を終えたので，その結果を整理・分析・考究するのが本稿の目的である。分析は，年度別，男女別，高校卒後経年（以下「経年」）別に行われる。

2　用具と統計法

調査に用いた３種類のテストと統計処理の方法は以下のとおりである。

2.1　聴解テスト

聴解テストには大学英語教育学会（JACET）と語学教育振興会（COLTD）共同開発の

Listening Comprehension Test Form A (1975) (以下「ＬＣ」) を用いた。ＬＣは日本全国16大学，約1500名の学生に試用して作成された標準テストである。２つの短い文の示す情報の正誤を問う20問,2つの短文の意味の同異を問う20問,3～６文からなる短いストーリーの内容に関して３肢選択のＱＡを行う10問からなっており，誤答は減点されるのが特徴である。満点は120点，所用時間は約30分である。

2.2 クローズテスト

クローズテストとは,1953年 Taylor がゲシュタルト心理学の「閉合の原理」に基いて提唱した母国語の文章の readability 測定の方法であったが，次第に外国語の文法力，読解力，作文力，つまり総合力を測定するものとして開発されたテストである。適当な長さの文章から５～10語目ごとの単語を抜いて，数十個の空白を作り，もとの語を推測で復元させるテストである。その推測に総合的語学力が必要とされるという。採点法には，原語のみに得点を与える正語法と，文法・意味両面で原語に近いものにも得点を与える適語法とがある。

この調査で使用したクローズテスト（ＣＬ）は，高校１年程度の254語からなる笑い話に，ほぼ７語目毎に34の空所を設けたものであり，適語法で採点した。満点は68点，所用時間は20分である。

2.3 速読テスト

速読テストには，Ｄ・セル，安藤昭一編著「英文速読法」[3] 付録の Test 1 を使用した。高校２年程度の文章で,625語と550語の２部からなっている。各部毎に計時し，平均ＷＰＭ (words per minute) を算出し，またそれぞれ４肢選択５問の理解度テストを行う。速読としてはこの得点（ＳＣＲ）が６～８点程度であるのが望ましいと言われている。統計をとる場合，ＷＰＭに正解率を掛けて「速読能率度」に一元化する方法もあるが，ＷＰＭによる「速度」が顕示されるよう，ＳＣＲとの併記を主とした。所要時間は約25分である。

2.4 統計処理

各テストは,4月の第１～２回目の授業で実施したため，入学者全員が受験していることが多いが，小数の欠席者がいることもある。いずれの統計にも個数（Ｎ），平均 (Aver.)，標準偏差（ＳＤ）を算出した。平均の有意差 (Sign.Diff.) の検定には t 検定を行い，$p<0.05$ で有意差がある場合のみ，不等号を用いて表中に示した。

経年別の区分は，現役 (K0),1浪（Ｋ１),2・３浪（K23)，多浪（Ｋ４&)，大学卒 (Grd) の５種類とした。多浪は大卒を含んでいない。

3 結 果

3.1 クラス全体の年度別比較

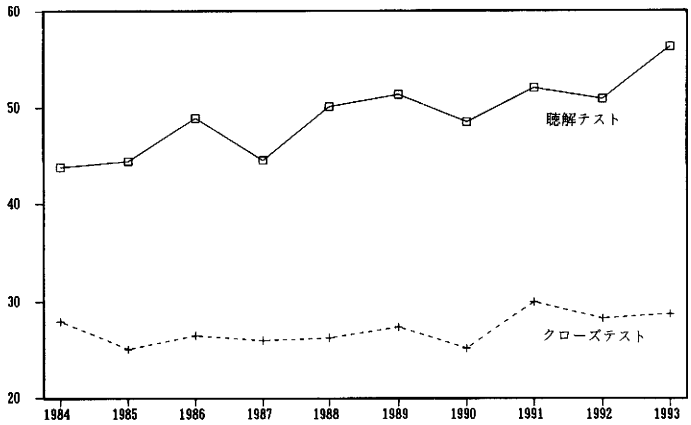
(1) 聴解力

資料で明かなように，聴解力はこの10年間，全体的傾向としてほぼ順調に伸びてきおり，

特に84年（43.8），85年（44.4），87年（44.5）が低く，89年（51.3），91年（52.0），93年（56.3）が高い。84年と93年では12.5点の有意差がある。（付表2，図1参照）

これは，入学生の資質，特に英語学力そのものが年々向上したことを示すものなのか，それとも全国の大学受験者層全体に英語聴解力の向上がみられることを暗示するものなのか，興味ある問題である。

〈図 1〉 聴解（LC）とクローズ（CL）テストの結果（入学生全員）

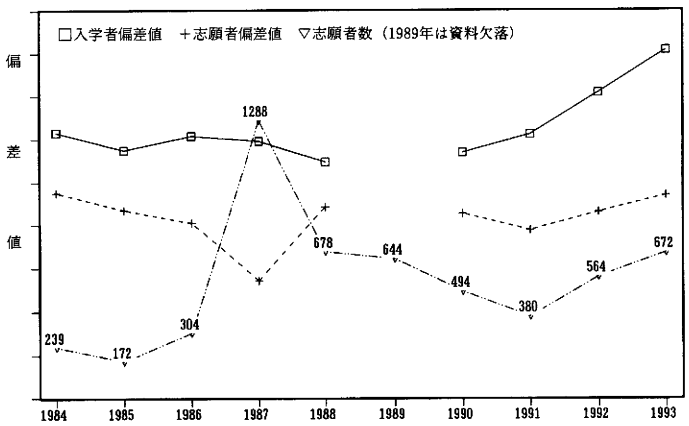


いずれにしても，最近の本学入学生の英語聴解力は，このテスト作成当時（1972年）の全国国公立大学理科系平均（38.08：N＝450）[4]および1975年～1980年5年間春秋10回のテストの同種平均（44.0：N＝1830）[5]より相当に高い。なお，その5年間10回の総合平均は31.0～42.9を上下変動しており，一定の方向性は見られない。参加大学がその都度変わるからであろう。

(2) クローズテスト

英語の総合学力を表すというクローズテスト得点の動きを，同じく付表2および図1でみると，分離分割方式に変わった91～93年（30.0，28.2，28.7）が10年間のベスト3であり，特に分離分割初年度の91年は群を抜いて高く，それまでのどの年度と比較しても有意差がある。

〈図 2〉 本学入学者の共通1次・センター試験外国語（英語）の偏差値と本学志願者数



87年度から93年度までの聴解力とクローズの変化パターンを比較すると，変化率は異なるが，変化の方向

はほぼ同じである。因みに10年間の聴解，クローズ，そして速読（WPMとSCR）の各テスト完全受験者995名についての相関係数では，聴解とクローズの間には0.489という適度の相関が見られる。（付表3参照）

今ひとつ，英語学力を継年的にみる資料として，共通1次，センター試験における入学生および志願者の英語の偏差値と本学の志願者数の変動を調べた。(図2参照) 因みにこの偏差値は，全国平均から本学の志願者，入学者がどの程度離れているかを示すものである。1989年は入試センターからの試験結果発表が不十分なためグラフが途切れている。1987年の志願者の偏差値の落ち込みが目立つが，この年は受験機会複数化の初年度で，志願者が1288名に急増し，第1次選抜で大幅な「足切り」を行った年である。志願者レベルでの1次英語力が急落しているが，入学者レベルでは従前と大差がない。10年間の入学者の偏差値の年次変動は，やや中だるみをみせているが，1991年で1984年のレベルを回復し，その後2年で急上昇を示している。分離分割方式になった3年間の現象である。聴解力も，グラフ上，特に前4年と後4年において，偏差値の動きにほぼ同調しているのが認められる。

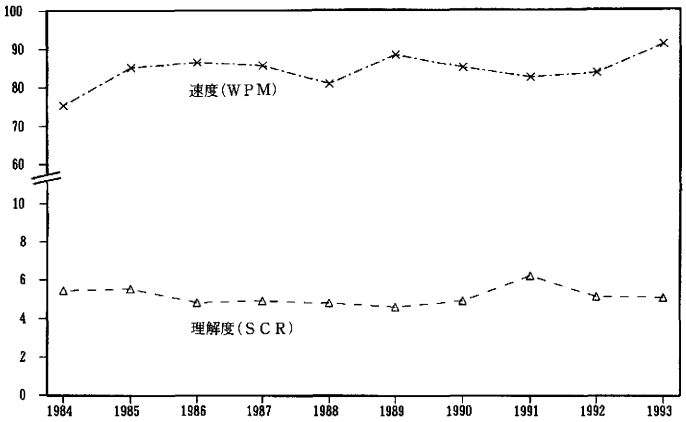
以上の資料から判断すれば，聴解力の上昇は1次英語で示される本学入学生の英語力全般の向上に相当影響されていることは否めないようである。しかし，AETの急増に象徴される英語教育界全体のコミュニケーション重視体制も聴解力上昇の1因ではないかと推測されるが，今は確証がない。

(3) 速読力（WPM と SCR）

入学生の英文を読む速度は75.4WPMから91.1WPMまでの範囲にあり，10年間の平均は84.4WPM程度である。(付表2，図3参照) 年次的には84年と88年が低く，89年，93年が高い。

速読をした場合の理解度（SCR）は10問中4.58から6.20の範囲にあり，平均はおおよそ5.14である。6割以上になったのは91年だけであり，全体に低いといわねばならない。

〈図 3〉 速読（速度WPM；理解度SCR）テストの結果（入学生全員）

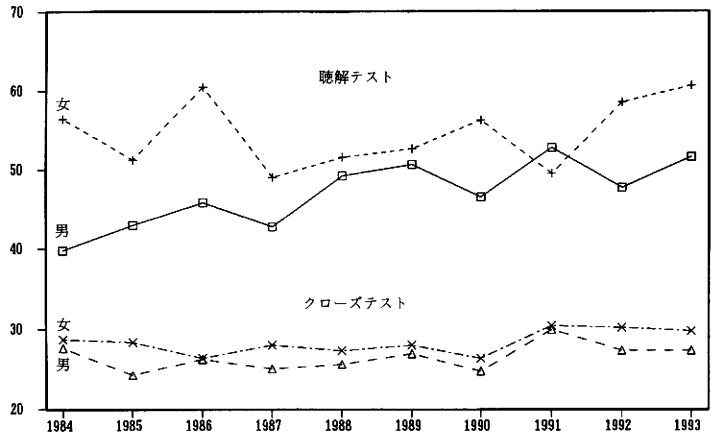


試みに速読能率度（WPM×SCR／10）を算出すると，85年（46.9）と91年（51.2），92年（42.8），93年（46.2）が高く，91年は特に際立っている。ここにも分離分割の影響が現れているようだ。最低は88年（38.7）であり，入学者の1次英語の偏差値が最低であった年に当たる。

3.2 男女別比較

(1) 聴解力においてはグラフでみる限り，女子学生が男子学生よりもかなり高い。しかし，有為差が検出されたのは,84年だけである。それぞれの集団において分散が大きいからであろう。（付表4，図4参照）

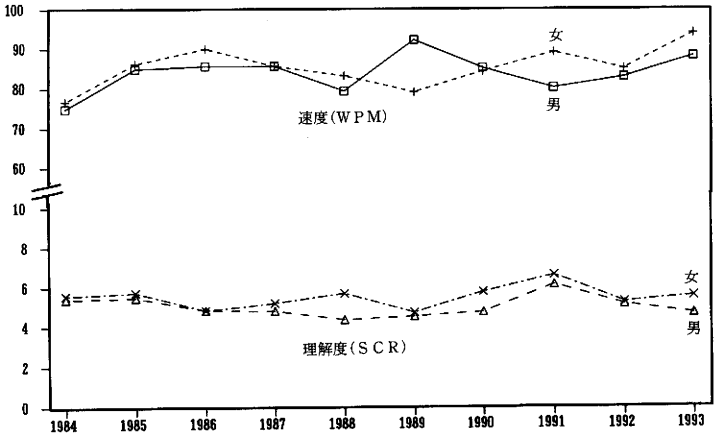
〈図 4〉 聴解（ＬＣ）とクローズ（ＣＬ）テストの結果（男女別）



(2) クローズテストに関しては，女子学生が男子学生よりやや優位に見えるが，差は僅少であり，もちろん有為差は全く出ていない。（付表5，図4参照）

(3) 速読（ＷＰＭ，ＳＣＲ）においては，男女差は認め難い。ただ,88年と90年の理解度（ＳＣＲ）においては，女性が10～13%上位の有為差を示している。（付表6,図5参照）

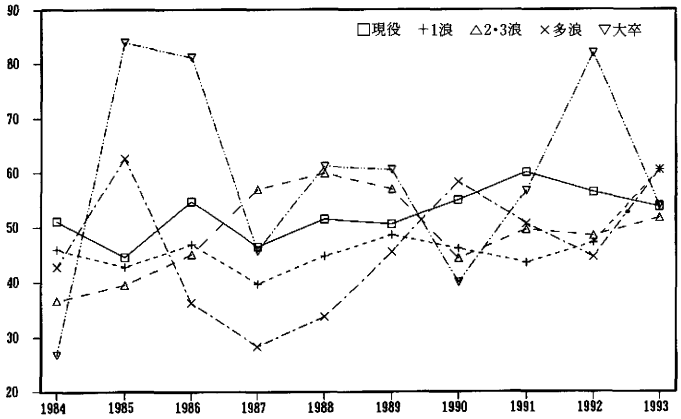
〈図 5〉 速読（速度ＷＰＭ；理解度ＳＣＲ）テストの結果（男女別）



3.3 経年別比較

(1) 聴解力を入学生の経年別に比較する。（付表7,図6参照）グラフ上，図１でみた入学生全体の聴解の年次変動に近いパターンを示しているのは，現役（K0）と１浪（K1）である。それぞれのグループの全体に対する人数構成比率が10年平均で33.3%,33%であることを勘案すれば，比較的安定した動きをする理由が分かる。反面，同趣の比率で,7.4%,4.5%しかない多浪（K4&）や大卒（Grd）の動きは激しい。ある年は最高，ある年は最低となっている。

〈図 6〉 聴解（ＬＣ）テストの結果（経年別）

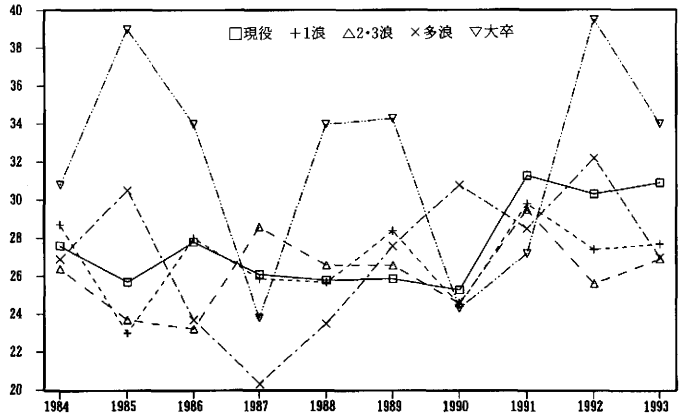


注目すべきことは，安定した統計値を示す現役と１浪が93年を除いてほとんど毎年，現役＞１浪の関係にあることである。その有意差は91年の１回しか検証されていないが，「聴解力は１浪より現役の方が勝る」という傾向は明白である。その理由は何であろうか。推測の域を出ないが，高校ではテープレコーダーの使用など，英語の音声教育に関心が払われているであろうが，予備校を含め，浪人時代の学習は，文法（作文），読解力の挽回に全力が注がれ，音声面から遠ざかるからであろう。

人数構成比率21.8%の２・３浪（K23）も,87年,88年,89年の３回は現役に勝っているが，他７年は現役より聴解力が低い傾向を示している。

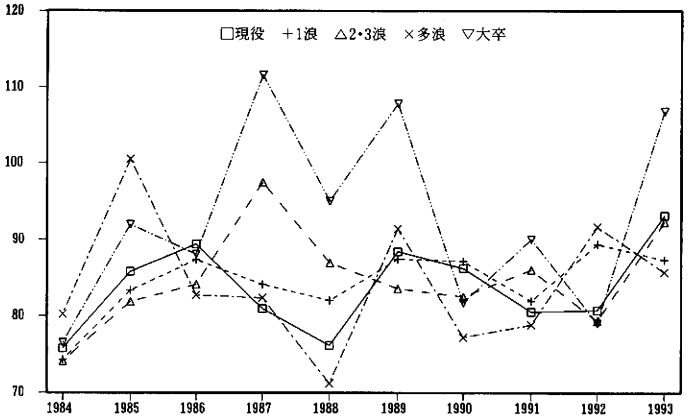
(2) クローズテスト成績の年次変動パターンも，概略聴解の場合に似ている。（付表8,図７参照）特に，大卒と多浪にそれが顕著であり，大卒の優位が目立つ。また，現役,1浪が変動の中核であることも聴解の場合と同じである。ただし,ここでは1浪のほうが常に下位であるという傾向は認められない。

〈図 7〉 クローズ（ＣＬ）テストの結果（経年別）



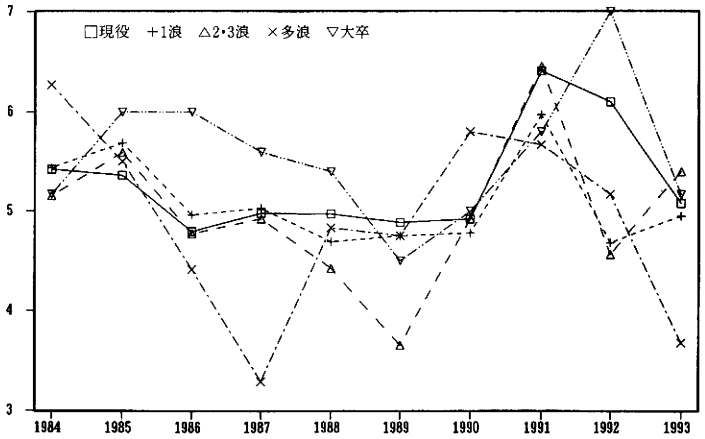
(3) 速読力においては，大卒が87年に111.6WPM,88年に95.7WPM,89年に107.8WPM,93年に106.8WPMと，いずれも当該年で際立った最高値を記録している点が注目される。（付表9,図8参照）これは大学で英語にしっかり触れた年数，つまり読書量が速読力の要因であることを示唆するものであろう。多浪は最高であったり，最低であったりして定まらない。現役,1浪,2・3浪は比較的近似したWPMの変動をみせている。

〈図 8〉 速読（速度WPM）テストの結果（経年別）



速読時の理解度（SCR）については，やはり大卒が比較的優位であること,2・3浪，多浪が時々最低をマークすることなどが特徴的である。（付表10,図9参照）

〈図 9〉 速読（理解度SCR）テストの結果（経年別）

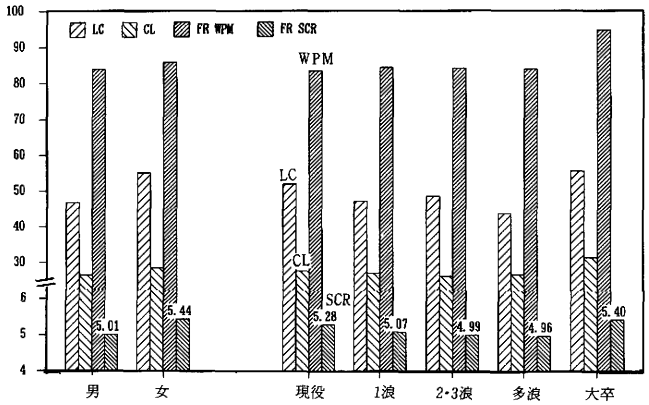


4 男女別，経年別10年間総合所見

男女別，経年別の対比を鮮明にするため，同一のテストをうけてきた10年間の入学生全員を1集団と仮定して，それぞれの平均点を比較，検定してみた。（付表11,図10参照）

男女別では，聴解において女子55.1対男子46.8,クローズにおいて28.5対26.5，速読の理解度（SCR）において5.44対5.01と女子学生が有意差をもって男子学生に勝っている。速読のスピード（WPM）においてはほとんど差がない。

〈図 10〉 聴解（ＬＣ），クローズ（ＣＬ），速読（ＷＰＭ；ＳＣＲ）テストの結果
（１０年間総合ーー男女別，経年別）



経年別では，聴解において大卒（55.5）と現役（51.8）が明らかに優れており，1浪（47.1）と多浪（43.6）が明らかに低い。クローズにおいては，大卒（31.2）が他のどの群よりも有意差をもって優れており，2位の現役（27.5）も最下位の２・３浪に有意差をつけている。ＷＰＭにおいても，大卒（94.8）が他の４群（84.3～83.5）に10ＷＰＭ以上の有意差をつけている。理解度においても大卒（5.40），現役（5.28）が上位を占めているが，いずれも後続群との有為差はない。

5　考　察

5.1　結果のまとめ

本調査では，教育上実施可能な範囲で，10年間継続的に，本学入学生の英語の学力の動向を，聴解，クローズ（読解・文法ー総合力），速読という３断面で捉えようとした。そこで得た知見をまずまとめて，考察を進めたい。

1）本学入学生の聴解力は過去10年間ほぼ継年的に上昇してきた。

2）その聴解力のレベルは全国平均よりも高いと推定される。

3）聴解力とクローズテストとは適度（ｒ＝0.489）の相関を示した。

4）１次英語の成績の動向がある程度聴解力に影響した。

5）分離分割方式が入学生の英語学力をある程度高めた。

6）聴解，クローズ，速読（理解度）において女子学生が男子学生に勝っていた。

7）聴解、クローズ，速読（速度）において大卒が他の経年グループに勝っていた。

8）聴解において現役は１浪に勝っていた。

5.2　考　察

(1)　上記1,2のとおり，入学生の聴解力が全般的に良好であることは，平生の授業中にも感じられる。例年，平均的大学教養英語用のリスニング教科書を使用しているが，大抵の dialogue や presentation は１回の聞き取りで平均６－８割の聴解率を示す。また，外人教師による英会話の授業においても，聞き取り上の問題点はあまり指摘されたことがない。

しかしながら，上下の差が相当にあることも事実である。特に入学当初においては，外国

生活の経験者から，初めてＬＬ・聴解の授業を受けるという学生まで，その差は大である。この較差は速読においても見られる。これは「授業の個別化」「学生中心の授業」という基本理念に基づき，種々の方策を工夫することによって今後解決されるべき問題であろう。

(2) 上記まとめの1,4,5に関して，入学生の英語聴解力やクローズ解決力の変動の要因，メカニズムが何であるのか，推論を試みる。既に述べたように，教育界，社会全般の英語・（音声による）コミュニケーションに対する環境は改善されつつあるが，その影響の測定は容易ではない。大学入試との関係のみに絞って考えてみたい。図２によれば，聴解力やクローズ力の元といえる入学者の１次英語の偏差値の動向は,87年の特異な例を除いて，おおよそ志願者の偏差値の動向に連動している。そして，志願者の偏差値の変動は，少なくとも88年以降，つまり受験機会複数化時代においては，志願者数の変化に連動しているように見受けられる。ではその志願者数は何に影響されるのであろうか。87年の例にみられるようにまず入試制度の変更が挙げられる。それと同時に，その制度下における各大学・学部の動き，当該大学・学部に関する諸種の情報などが大きな要因をなすのであろう。

このような一連の因果関係を勘案するとき，本学入学生のの聴解力等が向上したと言っても，その原因を一に帰することはできない。ただ，この事実を事実として受けとめ，(1)で述べたように，その優れた能力を更に発展させる努力が求められるばかりである。

(3) やや細部に亘るが,91年以降の分離分割体制下における前期入学生，後期入学生の差にも関心がもたれる。今回の聴解等のテスト結果３年分をまとめてみた。（付表12参照） 聴解では後期がやや高いが，有意差はない。クローズでは差がない。速読は後期が有意差をもって前期に勝っている。後期は現役（30%），大卒（6.7%），女子（51%）の割合が前期（それぞれ28.3%,3.8%,30.4%）よりも大きいことと関連があるようである。

(4) 上記まとめの６に関して，女子学生が優勢であるというこの傾向は，本学のみの現象か，全国的傾向なのか，興味ある問題であるが，現在のところ全国の最近の資料は不明である。ただ，少々古いが1972年の資料[6]では，本調査で使用したのと同じ聴解力テストで，全国大学生男子の平均が39.82（N＝747）に対して女子は24.17（N＝732）と大きな較差をもって女子が劣勢になっている。

また，本学入学生の女子の優勢は単に入学後の聴解テスト等にとどまらず，既に１次,2次の入試英語においても現れているのではないかと推測される。この問題は経年別グループの比較とあわせて稿を改めて調査する予定である。

6 結 語

本来，学力を測定するということは非常に困難な作業である。まず学力とは何かが十分に定義されなければならない。英語の場合，まず，読む，書く，聞く，話すの４技能を測定することが考えられるが，いずれにも共通する力として文法，語彙があり，また音声面や文化

的背景がある。それらを網羅して測定することは，教育の現場においては事実上不可能と言わざるをえない。また，特定の分野においても，その学力を如何にして効率的に測定するか。テストの弁別力，信頼生，妥当性等を実証した標準テストを如何にして作成し，あるいは利用するか。また実施上の問題もある。時間，管理ー特に毎年同一問題でテストする場合の管理法，そして採点等，実際の授業計画の中で処理されねばならない。

上記の諸条件を考えれば，今回の調査で用いた諸テストは，決して理想的なものとは言えない。教育の一貫として実施したテストを調査にも利用したのである。聴解テストはＬＬ教育に必須であり，速読テストは速読の授業のスタートラインとしてこれまた必要である。クローズテストも読解の授業や試験でよく用いる方法である。ともかくも，教育現場で利用し得るものを利用し，現に教育する学生の学力を継続的に“定点観測”した結果の報告である。限界を知りつつも，以上の知見を得たことで本調査の目的は達せられたと言えよう。協力してくれた学生諸君に感謝をする次第である。

注

(1) 萬戸克憲，「国際化とＡＬＴ導入」『英語教育』42－6, 大修館, 1993.

(2) 伊部　哲，「学校段階別に見た英語教育の概観」『英語教育』42－４（別冊），Ｐ.7, 大修館, 1993.

(3) Ｄ・セル，安藤昭一，『英文速読法』英潮社, 1971.

(4) 共同研究小委員会，「大学生のための標準英語聴解力テスト作成に関する最終報告」『大学英語教育学会紀要』5, Ｐ.33, 1974.

(5) テスト研究開発委員会「英語聴解標準テスト(B)作成に関する報告」『大学英語教育学会紀要』12, Ｐ.17, 1981.

(6) (4)と同じ。Ｐ.34.

藤 枝 宏 壽

Abstract

An Assessment of the English Competence of the Enrollees from 1984 to 1993

—in the Phases of Listening Comprehension, Cloze Test, and Faster Reading—

Koju FUJIEDA
English Department

During the past ten years many changes have been seen in the entrance examination system, the curriculums in junior and senior high school, and the employment programs of Assistant English Teachers. How has the level of new students been affected under these conditions? To answer this question, the author has conducted the same three tests for the newcomers annually in April over the past ten years: A Listening Comprehension Test (LC), Cloze Test (CL), and Faster Reading Test (FR).

The results were as follows:

1 The LC ability of the enrollees of this college showed a rising tendency during the past ten years.

2 The above mentioned ability is estimated to be on a higher level than the nationwide average.

3 The LC ability correlated moderately with the CL ability at 0.489.

4 There was an observable correlation between the results of the Center Test (English) and the results of the LC and CL.

5 The introduction of the new Separate-Split Entrance Examination system seemed to enhance the level of English performance among the freshmen.

6 The female students significantly surpassed the male students in LC, CL, and FR(especially in comprehension).

7 The freshmen who had graduated from other colleges significantly surpassed the other age groups in LC, CL, and FR (especially in speed in terms of Words per Minute.)

8 The freshmen admitted directly after graduation from high school significantly surpassed the group coming one year after graduation from high school in LC.

The implications of the above findings are discussed in the hope of benefiting further English education in many ways.

付　　表

【付表１】　開学以来の入試状況と英語教育環境

年度	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986
志願者 (受験者)	441 (324)	210 (205)	257 (245)	424 (404)	239 (231)	172 (164)	304 (296)
共通１次 センター試験 ２次試験	5教科7科目 (1000点) 3教科4科目(600点)					5教科7科目 (1100点―傾斜配点) 2教科8科目 (600点)	
高　校	英語4科目 MAX4700語		英語5科目 MAX2950語				
中　学	標準週3時間 3領域	週3時間 3領域					
AET総人数	35	54	74	108	132	167	235

年度	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993
志願者 (受験者)	1288 (521)	678 (579)	644 (562)	494 (474)	*380 (*344)	*564 (*413)	*672 (*490)
共通１次 センター試験 ２次試験	5教科5科目 (900点) A日程 2教科8科目(600点)			センター試験 5教科7科目 (1000点) 分　離　分　割 2教科8科目 (500点)			
高　校	英語5科目　MAX2950語						
中　学	週3時間　3領域			週3－4時間 4領域			
AET総人数	JET開始 848	1443	1987	2284	2874	3324	

＊前期，後期の合計

【付表２】　聴解(LC)，クローズ(CL)，速読(WPM；SCR)テストの結果(入学生全員)

		1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993
LC	N	100	100	101	100	103	106	100	99	100	100
	Aver.	43.8	44.4	48.9	44.5	50.1	51.3	48.5	52.0	50.9	56.3
	SD	27.6	23.4	30.5	25.0	50.1	51.3	23.1	26.7	29.2	24.6
有意差		y84＜y89, y91, y93			y85＜y89, y91, y93			y87＜y91, y93		y90＜y93	
CL	N	100	100	99	99	102	103	99	95	100	100
	Aver.	27.9	25.0	26.4	25.9	26.2	27.3	25.1	30.0	28.2	28.7
	SD	7.1	8.4	8.7	8.0	7.8	8.2	8.0	6.5	8.5	7.6
有意差		y84, y85, y86, y87, y88, y89, y90＜y91 y90＜y84, y92					y85＜y84, y92, y93			y87, y90＜y93	
WPM	N	100	100	99	100	103	106	100	98	100	99
	Aver.	75.4	85.2	86.5	85.6	80.8	88.5	85.1	82.6	83.6	91.1
	SD	19.2	19.6	20.6	23.0	20.5	24.5	26.8	20.1	19.5	20.6
有意差		y84＜y85, y86, y87, y89, y90, y91, y92, y93 y85, y88, y91, y92＜y93						y88＜y89			
SCR	Aver.	5.45	5.51	4.81	4.90	4.79	4.58	4.91	6.20	5.13	5.07
	SD	1.65	2.00	1.94	1.85	2.13	2.14	1.84	1.93	2.00	1.83
有意差		y84, y85＞y86, y87, y88, y89, y90 y85＞y91　y91＞y87, y88, y89, y90, y92, y93									
WPM x SCR/10		40.9	46.9	41.6	41.9	38.7	40.5	41.8	51.2	42.8	46.2

【付表3】 相関係数表（10年間995名について）

	聴解力（LC）	クローズ(CL)	速読（WPM）	速読（SCR）
聴解力		0.489	0.256	0.125
クローズ			0.164	0.183
WPM				0.046
SCR				

【付表4】 聴解（LC）テストの結果（男女別）

		1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993
男子(M)	N	76	83	80	72	68	75	81	74	72	49
	Aver.	39.8	43.0	45.9	42.8	49.3	50.7	46.6	52.8	47.8	51.7
	SD	25.8	22.0	29.5	24.4	27.7	26.0	22.7	24.9	29.4	23.8
女子(F)	N	24	17	21	28	35	31	19	25	28	51
	Aver.	56.4	51.3	60.5	49.1	51.6	52.7	56.3	49.6	58.6	60.7
	SD	29.0	28.3	31.6	25.8	24.5	24.3	23.0	31.3	27.2	24.5
有意差		F>M									

【付表5】 クローズ（CL）テストの結果（男女別）

		1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993
男子(M)	N	76	83	78	71	67	72	80	70	72	49
	Aver.	27.7	24.3	26.3	25.1	25.6	27.0	24.8	29.9	27.4	27.4
	SD	6.85	8.54	8.76	7.67	8.34	8.34	8.08	5.84	8.39	7.58
女子(F)	N	24	17	21	28	35	31	19	25	28	51
	Aver.	28.7	28.4	26.4	28.0	27.3	28.0	26.4	30.4	30.2	29.8
	SD	7.68	6.75	8.47	8.53	6.59	7.67	7.73	8.16	8.29	7.38
有意差											

【付表6】 速読（WPM；SCR）テストの結果（男女別）

		1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993
男子WPM	N	76	83	78	72	68	75	81	73	72	48
	Aver.	74.9	85.0	85.6	85.6	79.4	92.3	85.2	80.3	83.0	88.2
	SD	19.4	19.6	20.6	22.8	22.3	26.2	28.1	19.8	19.0	20.0
女子WPM	N	24	17	21	28	35	31	19	25	28	51
	Aver.	76.7	86.2	90.0	85.7	83.3	79.2	84.4	89.2	85.1	93.9
	SD	18.4	20.0	20.3	23.6	16.1	16.7	20.5	19.3	20.7	20.7
有意差											
男子Score	Aver.	5.41	5.47	4.81	4.79	4.34	4.52	4.72	6.08	5.11	4.63
	SD	1.67	2.03	1.93	1.77	1.98	2.07	1.83	2.00	2.10	1.89
女子Score	Aver.	5.58	5.71	4.81	5.18	5.66	4.71	5.74	6.56	5.20	5.49
	SD	1.58	1.80	1.99	2.02	2.14	2.27	1.68	1.63	1.75	1.67
有意差						F>M		F>M			

【付表７】　聴解（ＬＣ）テストの結果（経年別）

		1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993
現役 (K0)	N	24	45	33	46	37	36	26	35	29	25
	Aver.	51.1	44.5	54.7	46.5	51.4	50.6	55.0	60.1	56.5	53.84
	SD	30.6	24.0	32.4	24.2	23.8	27.3	21.7	24.5	33.5	22.4
1浪 (K1)	N	39	26	24	29	36	36	41	30	31	41
	Aver.	45.9	42.7	46.8	39.7	44.7	48.6	46.2	43.6	47.3	60.6
	SD	22.5	20.3	29.3	22.9	24.9	25.0	21.5	24.6	25.2	18.6
2･3浪 (K23)	N	20	22	22	13	19	20	25	22	32	25
	Aver.	36.7	39.5	45.0	56.9	59.9	57.1	44.4	49.5	48.5	51.8
	SD	20.8	21.8	28.1	24.7	23.8	24.3	26.5	28.7	27.5	27.5
多浪 (K4&)	N	11	6	17	7	6	8	5	6	6	3
	Aver.	42.7	62.7	36.3	28.3	33.7	45.5	58.4	50.7	44.7	60.7
	SD	33.7	24.0	25.7	21.4	22.6	22.3	16.4	21.8	29.2	39.5
大卒 (Grd)	N	6	1	5	5	5	6	3	6	2	6
	Aver.	26.7	84.0	81.2	45.6	61.2	60.7	40.0	56.7	82.0	54.0
	SD	37.4	0.0	12.9	29.2	47.3	18.8	15.6	30.4	6.0	37.6
有意差			K4&＞K1 K4&＞K23	Gr＞K1 Gr＞K23 Gr＞K4&	K23＞K4&	K23＞K1 K23＞K4&			K0＞K1		

【付表８】　クローズ（ＣＬ）テストの結果（経年別）

		1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993
現役 (K0)	N	24	45	33	46	37	36	26	34	29	25
	Aver.	27.6	25.7	27.8	26.1	25.8	25.9	25.3	31.3	30.3	30.9
	SD	7.43	7.25	8.73	7.62	6.71	7.86	7.51	6.34	7.96	6.13
1浪 (K1)	N	39	26	23	29	35	36	41	29	31	41
	Aver.	28.7	23.0	28.0	25.9	25.7	28.4	24.5	29.8	27.4	27.7
	SD	7.31	8.04	8.39	7.07	7.44	8.17	8.13	6.05	7.11	7.02
2･3浪 (K23)	N	20	22	22	13	19	20	24	21	32	25
	Aver.	26.4	23.7	23.2	28.6	26.6	26.6	24.6	29.5	25.6	26.9
	SD	5.19	10.05	8.40	9.44	8.50	8.79	8.33	6.93	9.33	8.10
多浪 (K4&)	N	11	6	17	6	6	7	5	6	6	3
	Aver.	26.9	30.5	23.7	20.3	23.5	27.6	30.8	28.5	32.2	27.0
	SD	8.76	6.58	7.35	8.81	10.77	6.78	8.35	5.50	5.15	0.82
大卒 (Grd)	N	6	1	4	5	5	4	3	5	2	6
	Aver.	30.8	39.0	34.0	23.8	34.0	34.3	24.3	27.2	39.5	34.0
	SD	3.39	0.00	6.75	8.08	6.54	3.34	2.49	8.13	6.50	10.95
有意差			K4&＞K1	Gr＞K23 Gr＞K4&		Gr＞K0 Gr＞K1	Gr＞K0			K0＞K23 Gr＞K1 Gr＞K23	

【付表９】　速読（速度ＷＰＭ）テストの結果（経年別）

		1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993
現役 (K0)	N	24	45	33	46	37	36	26	35	29	24
	Aver.	75.8	85.8	89.4	80.9	76.1	88.4	86.2	80.5	80.7	93.2
	SD	20.4	18.8	20.4	16.8	16.4	26.2	26.0	19.8	17.8	18.8
1浪 (K1)	N	39	26	23	29	36	36	41	30	31	41
	Aver.	74.3	83.3	87.3	84.1	82.0	87.4	87.1	81.9	89.4	87.3
	SD	16.2	17.4	22.7	19.0	19.6	22.1	32.5	11.6	19.5	15.2
2･3浪 (K23)	N	20	22	22	13	19	20	25	22	32	25
	Aver.	74.1	81.8	84.1	97.5	86.9	83.5	82.5	86.0	79.3	92.3
	SD	22.6	21.9	17.2	33.9	28.4	24.0	18.8	29.7	17.1	24.1
多浪 (K4&)	N	11	6	17	7	6	8	5	6	6	3
	Aver.	80.2	100.5	82.7	82.3	71.2	91.4	77.2	78.8	91.7	85.7
	SD	16.2	19.9	20.6	18.9	11.1	15.9	13.5	8.7	30.0	9.5
大卒 (Grd)	N	6	1	4	5	5	6	3	5	2	6
	Aver.	76.5	92.0	88.0	111.6	95.0	107.8	81.7	90.0	79.0	106.8
	SD	22.5	0.0	21.7	33.9	5.1	28.6	16.9	15.6	2.0	33.6
有意差			K4&＞K1		K23＞K0 Gr＞K0 Gr＞K1	Gr＞K0 Gr＞K4&					

【付表10】　速読（理解度ＳＣＲ）テストの結果（経年別）

		1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993
現役 (K0)	N	24	45	33	46	37	36	26	35	29	24
	Aver.	5.42	5.36	4.79	4.98	4.97	4.89	4.92	6.40	6.10	5.08
	SD	1.44	1.97	2.00	1.78	2.37	2.50	1.66	1.82	2.04	1.89
1浪 (K1)	N	39	26	23	29	36	36	41	30	31	41
	Aver.	5.44	5.69	4.96	5.03	4.69	4.75	4.78	5.97	4.68	4.95
	SD	1.61	1.94	2.16	1.71	1.85	1.83	1.99	1.78	1.71	1.59
2･3浪 (K23)	N	20	22	22	13	19	20	25	22	32	25
	Aver.	5.15	5.59	4.77	4.92	4.42	3.65	4.92	6.45	4.56	5.40
	SD	1.39	2.23	1.91	2.06	1.84	1.88	1.79	2.33	1.92	2.24
多浪 (K4&)	N	11	6	17	7	6	8	5	6	6	3
	Aver.	6.27	5.50	4.41	3.29	4.83	4.75	5.80	5.67	5.17	3.67
	SD	2.22	1.71	1.50	1.39	2.54	1.98	1.72	0.75	1.86	0.47
大卒 (Grd)	N	6	1	4	5	5	6	3	5	2	6
	Aver.	5.17	6.00	6.00	5.60	5.40	4.50	5.00	5.80	7.00	5.17
	SD	1.77	0.00	1.41	2.15	2.33	1.50	1.41	2.14	1.00	1.07
有意差					K0＞K4& K1＞K4& Gr＞K4&		K1＞K23			K0＞K1 K0＞K23	Gr＞ K4&

【付表11】　聴解（ＬＣ），クローズ（ＣＬ），速読（ＷＰＭ；ＳＣＲ）テストの結果

（10年間総合――男女別、経年別）

テスト		男子	女子	有意差	K0	K1	K23	K4&	Grad.	有意差
ＬＣ	N	730	279		336	333	220	75	45	K0>K1, K0>K4&
	Aver.	46.8	55.1	F>M	51.8	47.1	48.5	43.6	55.5	Grd>K1,Grd>K4&
	SD	26.0	27.0		26.9	24.	26.7	28.1	34.5	
ＣＬ	N	718	279		335	330	218	73	41	K0>K23, Grd>K0
	Aver.	26.5	28.5	F>M	27.5	26.9	26.0	26.5	31.2	Grd>K1,Grd>K23
	SD	8.07	7.83		7.71	7.73	8.26	8.3	8.32	Grd>K4&
ＷＰＭ	N	726	279		335	332	220	75	43	Grd>K0, Grd>K1
	Aver.	83.9	85.9		83.5	84.3	84.2	83.9	94.8	Grd>K23,Grd>K4&
	SD	22.6	20.4		20.8	21.0	24.2	19.6	26.9	
ＳＣＲ	N	726	279		335	332	220	75	43	
	Aver.	5.01	5.44	F>M	5.28	5.07	4.99	4.96	5.40	
	SD	2.	1.94		2.06	1.86	2.1	1.97	1.82	

【付表12】　聴解（ＬＣ），クローズ（ＣＬ），速読（ＷＰＭ；ＳＣＲ）テストの結果

（分離分割3年間総合――前期・後期別）

			List.Comp.	Cloze	FR : WPM	FR : SCR
91～93年	前期	N	239	235	237	237
		Aver.	52.5	28.9	84.3	5.35
		SD	26.6	7.47	19.2	1.97
	後期	N	60	60	60	60
		Aver.	55.2	29.0	91.4	5.93
		SD	28.4	8.18	23.8	2.03
t検定			−0.669012	−0.058023	−2.423935	−2.046520
有意差					あり（P<0.02）	あり（P<0.05）